

2018 県展 講評

1 絵画部門

【総評】

しっかりとした内容の堅実な作品が多かった。技法やモチーフなどが多様で、流行に流されず自分の描きたいものを見据えた制作が行われていて、非常に見ごたえがあった。抽象が少なく、年々具象画が増えているようだ。またあったとしても昔風の抽象画が多い。みなさん楽しく自由に描かれている印象を受けた。

【県展大賞、部門大賞・知事賞】《脱水》

的確なデッサン力・描写力がある。スクエア型のキャンバスに円を据える構成や、空間をひずませた構図などは挑戦的。若い世代特有の、自分を見つめ自分なりの世界観をつくることが行われている。またそれにとどまらず、社会に向けて何かを発信しようという意図も感じられる。狭い所にとじ込められながらも、見ている人を逆に睨みつけるような表現は、拘束された世界に対する反発か。だが、それをあからさまに描いておらず、タイトルもそれにつながっているところが良い。思念を蓄積させ、大きな画面に描き続けた意志がすごい。

【兵庫県立美術館賞】《WANKO!》

しっかりしたデッサン力があり、構図も絶妙で考えて作られている。躍動感がある犬のイメージがリズム良くつながっており、ずっと見ていることができる。発色にも濁りがなく、内側から光を発しているようだが、絵具の重厚感はきちんと残っている。ペットの写真を簡単に撮れてしまう昨今にあって、あえて絵を選び、絵でしかできない表現によって犬への愛情という作者の感情が表された作品であり、見れば見るほど味わい深い。

【神戸新聞社賞】《骸》

描写や構図からストレートに訴えたいことが伝わってくる。すべてにおいて優等生的で、こうした作品が県展の評価レベルの高さを維持してくれる。どこへでも行くことのできる自転車が砂に埋もれ朽ちていく表現に、さまざまなメタファーが含まれているようだ。自由が徐々に失われてゆく感覚。

【兵庫県芸術文化協会賞】《ミエナイ法則》

素材で勝負しているところに、普段からさまざまなものを扱い、制作上の試みを重ねてきた跡が感じられる。ものの色ではなく透明色を使っていることから、一般的な技法の一步先を進んでいる感がある。非常に計算されており、重層的にも物を見せてきている。ものに関する絵画は重くなりがちだが、この作品ではそのバランスが絶妙で、軽やかで自由な表現に

なっている点は魅力的。見ていて楽しい。

【伊藤文化財団賞】《Monochrome Victory of winter》

構図はユニークだが描写はとても的確。自分の表現を見つけ出しているが、昨年度の出品作と比べて新たな発見を感じられないので、もう少し頑張ってもらいたい。フラットな視点から自分を作品にしており、決して声高ではない寡黙な自画像になっている。

2 彫刻・立体部門

【総評】

応募数が少ないが作品のバリエーションは豊富で、それぞれオリジナルなものを出している。若い人のチャレンジを期待する。自分の足で作品を見に行つて広い視野で勉強し、作品としての完成度を高めていてもらいたい。また応募数が少ない理由として、美術や県展そのものの魅力が感じられなくなっているということがあるかもしれない。なぜやるのか、方法や方向性を考えないと、廃れていってしまうだろう。

【部門大賞・知事賞】《建御雷曲》

古びた遺跡から出てきたような印象、作品が持つ不思議な雰囲気魅かれる。部分は華奢な造りだが、全体としてバランスがよく、力強い安定感がある。また、手足の伸びが彫刻として調和しており、存在感のある作品になっている。

【兵庫県立美術館賞】《コモリンの陽光》

基本的な力量を備えた、彫刻らしい作品。軽やかに天に向かう様が表現されているが、鑑賞者の視線も自然と下から上に向かい、希望を感じさせる。台座も含めてスマートさがあり、見せ方がよく考えられている。

【神戸新聞社賞】《石と竹の握手・85才の挑戦》

政治、社会的なテーマを扱う姿勢は他の作品にないものであり、また、表現に対する執念が感じられるところも評価したい。テーマをストレートに表しているのが、ひねりが加わるとより面白くなるだろう。台座の造りも丁寧だと良かった。

【兵庫県芸術文化協会賞】《70才立っている》

材質のイメージとかけ離れた造形が面白い。予め計画して制作しているはずであるが、できあがったものは不思議な形で、作者の世界観に魅かれる。薄く、上辺にこだわった作品で、視覚をうまく使っている。

【伊藤文化財団賞】

該当作品なし

3 工芸部門

【総評】

関西は工芸のレベルが高い。兵庫県は、丹波焼や播州織など有名な工芸品も多く、工芸が盛んな県である。今回は、個々が自分を表現しようとした意欲的な作品が多く、兵庫県の工芸のレベルの高さが伺えた。ただ、出品数が減っているのは残念。全体の比率から考えると比較的若い人の出品数が多かったが、来年はもっと多くの方に挑戦してほしい。

【部門大賞・知事賞】《瞑想猫風》

染まっていない部分（白）を活かした大変大胆な構図である。真ん中を白く残すことは勇気がいるが、気負いなく仕上げています。ロウ染めの重なり部分のぼかしが上手で、普通はむらになるところもきれいに仕上げられており、技術力が高い。左右の模様を中央で合致させるのも難しいところ。染料も独特でデッサン力もある。一見わかり辛いが、見ているうちに猫のかたちが浮かび上がってくる、鑑賞者に語りかけるような作品である。身近なモチーフを愛情をもってよく捉え、高い技術力により作品に仕上げています点が知事賞にふさわしい。

【兵庫県立美術館賞】《ガラパゴス・・・歩行するかいの産卵》

造形のアイデアが面白い。下の黒い木の台と上に置かれた焼き物のかたちがガラパゴスを想像させる。釉薬の調合、濃度も計算されており、ひずみなく焼かれており、高い技術力がある。モチーフのアイデアは斬新で現代的である。中を覗き込むと卵が見えるところも鑑賞者に見る楽しみを与え、ストーリー性を高めている。また、「かい」をひらがなにしたことにより、「貝」「開」などさまざまな意味を想起させ、作品を見るだけではわからない部分も、このタイトルにより想像が膨らみ、多様な見方ができる。

【神戸新聞社賞】《濃淡刀 3》

磁土をひずまずことなくまっすぐに焼き上げることは大変難しい。焼いた後、すぐに表面を削って磨くという、非常に細かい作業を経ている。陶土より硬質な磁土を用いることで、刀の鋭さを表現している。きりっとした印象を与える軽やかなデザイン性を持ち、「刀」というモチーフは現在の流行にも乗っており、センスの良さが光る現代的な作品である。

【兵庫県芸術文化協会賞】《Spirit》

3つのパーツに分かれているが、それぞれがきちんと組み上げられるように作られており、高度な技術を伺わせる力作である。自分の表現したいことが詰め込まれ、ぶつけられているような勢いと力強さを感じる。骸骨や刀は流行のモチーフであり、ゲームの世界をも想起させる。ヴィジュアルからくる格好良さがあり、刀（角）の部分は造形的にも美しい。色のバランスも良く、作者の高い集中力を感じさせる。

【伊藤文化財団賞】《薄れゆく記憶》

型染めの技術力の高さを感じる作品である。見たままの風景を表現するのではなく、技法に即して形体を抽象化し、色を抑え全体のバランスをとっている。自分の記憶の蓄積を、一枚にまとめて表現することは現在の流行りでもあるが、その技法とモチーフとの摺り合わせに作者の努力を感じる。粗削りだが、型染めという伝統的な技法に挑戦していることは素晴らしい。今後に期待したい。

4 書部門

【総評】

バラエティに富んだ作品が多く集まった。漢字、かな、前衛といった各ジャンルの表現の違いが良く見られ、われわれの眼を存分に楽しませてくれた。惜しむらくは篆刻の作品がなかったこと。次年度以降に期待したい。

【部門大賞・知事賞】《白居易詩》

漢字。中国の明清時代の書風を思わせる。行と行の間の文字の絡みがすばらしい。文字の大小や長短がうまく表現され、また作品全体の立体感もよく表されており、全体の印象が良くなっている。白居易の詩情がよく感じられる。

【兵庫県立美術館賞】《ゆふつくよ》

かな。行の流れの美しさが良く出ている。漢字と異なり、一字一字の造形がなされない分、墨の濃淡で立体感を表すが、それが非常に成功している。余白との調和も良く出ている。

【神戸新聞社賞】《清風》

前衛。黒白のコントラストが良い。非文学的で造形的だ。上部の飛沫が効果的で、その上部が充実することで、リズムカルに明るく現代的な仕上がりとなっている。

【兵庫県芸術文化協会賞】《秋思》

漢字。中国の周の時代の金文による七言絶句からとっている。線が重厚さとともに温かみをも兼ね、充実した表現となっている。

【伊藤文化財団賞】《春の夜の月》

かな。やはり黒白の対比が明るさをもたらしている。地の白さをきれいに見せ、空間性を表現している。行に左右の傾斜をうまく利用し、しかも滞りなく流れが生まれている。

5 写真部門

【総評】

全体に、もとの画像の良さが良く出ている。しっかりとした観察に基づき、画面の隅々にまで神経が行き届いている。また昨年に比べ、組作品のバリエーションが増え、質が向上している。出品作はプリントサイズの小さいものが多く、大きければ良いというものではないが、来年以降は表現のスケール感、作品の見せ方の技術についても考えてもらえたらと思う。

【部門大賞・知事賞】《独りぼっち》

簡潔で精緻な構図で、人の足を止める力がある。一瞬のチャンスを逃さず、ファインダーの中で構図を決めていると思われ、経験値の高さを感じさせる。写真としての見やすさに加え、社会的な問題意識も含まれている。その内容は、群を抜いている。

【兵庫県立美術館賞】《生命》(いのち)

フィルムの粒子に近い加工を施し、新芽と朝日の絵画的美しさが際立つ。イメージと知性のあるクリエイティブな表現で、展示物としての大きさ、そのサイズ感やフレームともよく合っている。

【神戸新聞社賞】《牡蠣家族》

ドキュメンタリー的視点で写真を撮っているのは珍しい。取材能力の高さ、コミュニケーションの賜物である。ある程度状況が分かるようなものを写し、産業構造までも感じさせる。

【兵庫県芸術文化協会賞】《少年の春》

近くから遠くまでピントが合っているパンフォーカスで、技術・画面構成力が見事。色彩もきれいで、桜を前景に配した日本のかつ絵画的な構図でもある。

【伊藤文化財団賞】《循環城》

望遠レンズを用いた作品。即物的で、被写体自体も珍しいものではないが、縦の線の構成がうまく、事前に撮影場所を吟味したことによる、しっかりした構図になっている。

6 デザイン部門

【総評】

デザインと言いながらも、クラフトあるいはイラスト風の作品が多く、グラフィックデザインはわずかで、プロダクトデザインも見られなかった。手間をかけている作品が多いが、全体的にオリジナリティのあるものは少なかった。公募展でのデザイン部門の出品数の少なさは全国的にみられる風潮。今回はテーマを設けたことにより、作品にもこれまでより強いテーマ性が見られた。今後もテーマを設けることは有効であろう。しかし、対象となる領域が広いにも関わらず、絵画に近い作品が多いところから、部門の在り方について見直す必要がある。

【部門大賞・知事賞】《HYOGO150（おめでとう150）》

高い技術力があり、デザインというジャンルを明確に示す作品でもある。全体としてよくまとまっており、全作品の中で最も印象が強かった。人物の特徴を表すほくろが印象的であるが、伊藤博文に兵庫のイメージを託すのはもったいないようにも感じる。上下の文字の円形部分にある水平線は、日本海と太平洋に挟まれた兵庫県を思わせ、赤い円はその水平線に上る太陽のようである。文字に関しては少し処理が甘く改善の余地がある。

【兵庫県立美術館賞】《ひかりを運ぶコウノトリ達》

技術的には1席とほぼ同等の力がある作品。色彩のまとまりが見事で、センスが良い。シャガールのようなものであるが、より現代的である。コウノトリが羽を広げて兵庫を包み込んでいるイメージや兵庫の名所など、さまざまなイメージをちりばめているが、文字の部分ともども、アピールが弱く、文字に関してはよりデザイン的に強調するなど、それぞれの表現を強化すれば更に良くなるだろう。

【神戸新聞社賞】《AKUTAGAWA》

オリジナリティはそれほど感じられないが、絵画的な表現技術の高さを評価した。写真をもとに、人物の全体の印象をデザインに起こしている。絵画とデザインは異なるので、このデザインで何を語るのかという明確なアピールが求められる。紙のエッジ部分を白く残すなどのこだわりの「描く」作業についての信頼感を感じられ、絵画部門の出品もあり得ると思わせる作品である。

【兵庫県芸術文化協会賞】《道元禅食》

一見したところわかりにくいだが、色面分割により漢字を表現している。タイトルから道元の食に関する漢文を引用していると考えられる。大変チャレンジングでありオリジナリティが高い作品。文字の形体と相まって色彩が重すぎるが、この色使いには食に関する意味合

いがあるように思われる。コンセプトは興味深いが、もっと見ている人に伝わるような工夫が求められる。

【伊藤文化財団賞】《Are you Japanese?》

イラストレーションとしての表現力が高い。一見、日本の古典的なイメージを表現したよくなるスタイルの作品のように見えるが、タイトルから「日本」についての問いかけが込められているメッセージ性の強い作品であることがわかる。風刺画的に、ステレオタイプの日本を茶化しつつ、伝統文化への疑問や、日本のイメージと現代の日本人の実情を表現している。今後、批判的な目を更に研ぎ澄ませてほしい。